

前で演奏する事の難しさを改めて認識させられる貴重な体験となる。

一般的にはこれらの三つのタイプが適当に混ざりあって各自のシステムができ上がっているが、いずれにせよ暗譜の訓練はなるべく早い時期、できれば子供のうちから始めるべきであろう。

## 主役が来ない！

九月はじめから六月末までのシーズン中、ウィーンではシュターツオペー（国立歌劇場）はもとよりフォルクスオペー、テアター・アン・デア・ウィーンその他の劇場でほぼ毎日休むことなく公演が行なわれている。更にこれと並行して、規模の大小を問わずに催される連日のコンサート、その上ブルクテアターなどにおける演劇、等々盛り沢山の催し物が目白押しである。

こうしたいくつもの劇場やコンサートホールが、常に満員とはいかなくとも結構な数の観客・聴衆を動員している事実は驚くべきものである。一国の首都とはいえどもウィーンはそれ程特別に大きい都市ではない。何といってもオーストリア全体の人口が東京都のそれ以下である。ウィーンを訪れる観光客がいかに多いといっても、その全員が芸術ファンとは言いがたい。それにもかかわらぬ連日の盛況ぶりを眺めていると、こんな所にもウィーンの古くから積み重ねられた文化的伝統の深さが感じられる。

こうして毎日上演される作品は、テレビや映画とは異って常に「ライヴ」であるため、そこには出演者の疾病など、一連の不可抗力による予想外の事態が起こり得る一方、それに最大限対処できるだけのシステムも準備されている。身近な例として、オペラの場合はどのようになっていのだろうか。

歌手にとって致命的なのは、声が出なくなる事である。交通機関のストや事故が原因で移動中に足止めをくらったり、骨折その他の傷害で動けなくなるのも困り物だが、単なる風邪だけでも声に影響が現れてしまう。その上こういった病気は何月何日にかかる、などと予想できるものではなく、一年以上も前から決まっているスケジュールに遠慮なく、突如として襲ってくる。

細心の注意を怠らなかつたにもかかわらず、運悪く風邪をひいてしまったとしよう。五日後には大切な主役としての出演が予定されている。もしこれがものの数分で終わる端役であれば「ま、いいか」と諦めもつくが、主役となると未練も残る。しかし主役の長丁場を務めるには、たとえ健康であってもそれ相応の体力と声帯の耐久力が要求される。そしてこれが自分の今後のキャリアに影響を及ぼすかもしれない重要な出番であれば、そう簡単に投げるわけにもいかない。とにかく数日様子を見ながら人知の及ぶ限りの手をつくして養生してみる。それでも回復はかばかしくない。「キャンセル」という言葉は脳裏に浮かんできても、それに対する責任は？ ペナルティーは？ 他の出演者にかかる迷惑は…？

実際にこのような事態になったとしても、それが現実に個人の責任問題にまで発展する事は通常の条件下ではなく、ペナルティーもない。キャンセルの原因が不可抗力な理由によるものであれば、この際何らか別の手段によって、予定されている公演そのものを成立させる方が重要である。疾病や交通事情その他の理由によって出演者が劇場におもむけない場合、その当人に義務づけられているのは、遅くとも公演当日の正午までに出演不可能の旨を、当劇場のしかるべき責任者に伝える事のみである。それも特に文書である必要はなく、電話一本で用は済んでしまう。

数日前からキャンセルがわかっていたりキャンセルになりそうな気配が伝わっている場合には、劇場としてもそれなりの準備ができるが、当日になって突然連絡が入った時は大変である。ただちに代役として出演可能な歌手捜しが行われる。出演が予定されていた歌手よりあまりランクが違っても具合が悪く、そのあた

りも考慮しながらの電話攻勢が開始される。国内・国外を問わず、とにかく誰かが見つかるまでである。

いずれかの歌手が代役を承諾した場合、その歌手は考えられるすべての可能性を利用して、一刻も早く劇場に到着しなければならない。飛行機、汽車、タクシーその他、コストはいくらかさもうと劇場持ちである。ウィーンの場合、国境を越えてミュンヘンあたりからでもタクシーを使うしか他に方法がない場合が少なくない。

こうして代役の歌手が劇場に到着するまでの時間を利用して、劇場側では受け入れ態勢が整えられる。その歌手がふだん所属している、あるいは歌った実績のある劇場に問い合わせ、衣裳や靴などのサイズが調べられ、準備される。劇場に到着した歌手は事務所に申し出るとともに、まず衣裳合わせを行ない、最終チェックをする。その後楽屋で舞台化粧をほどこしてもらい間も、ぼんやりとしているわけではない。当日の演出責任者によって、舞台装置と舞台上での演技——どの場面では何を持ってどこまで歩き、どちらを向いて歌い、誰とどのような演技をするか——などの説明が行われる。時間がある場合にはセットされたステージを見る事もできるが、その時間すらないことも。

全ての準備を済ませて衣裳もつけた後、開演三十分前からは指揮者との音楽的打ち合わせ——ここは少し待って、ここは速めにサラッと、この音ははっきり欲しい、できればここで合図を……といったタイミングの確認——である。そして開演。楽屋で待機する。出番が近づくと呼び出しが入る。舞台の袖で係から必要な小道具を受け取り、いよいよオン・ステージ！

こうした「飛び入り」又は「飛び込み」と呼ばれる事態はしばしば起こり、これが代役の歌手にとって大劇場でのセンセーショナルなデビューになることも稀ではない。こうした意味ではオペラ歌手にとって「自宅待機も仕事のうち」と言えるかもしれない。代役がどうしても見つからない最悪の場合にはその日の演目を変更してしまう事もあるが、これにかかる手間と費用とを考えれば、歌手一人がいかに遠方からどれ程高

価な交通手段を使用して来たとしても、最終的決算としては安くあがる事になる。

日本でも年末に軒並み演奏されるベートーヴェンの第九交響曲のソロパートに関してだけは同様のシステムが出来上がっている。

アメリカでは普通「カバー」というシステムがとられる。これは重要な役を受け持つ歌手がキャンセルした場合はもちろんのこと、公演中に突然起こるかも知れない不慮の事態までを予想して準備されるものである。劇場とカバー契約をした歌手は公演が無事終了するまでカバーすべき歌手と全く同じ衣裳を着け、化粧を施されて楽屋やホテルの部屋などで待機していなければならない。待機中はテレビを見ようが何をしても構わないが、いざという時にはただちにステージに上がれるだけの度胸が必要である。結局は出番の回ってこない可能性の方が大きい「カバー契約」の報酬は、存外悪くないそうである。大劇場でのプレミエのような重要な公演では第一、第二、第三カバーぐらいいまでひとつの役に対して準備される事もあるという。

歌劇とは何と大がかりで贅沢な、金のかかる芸術であろうか。

## 奈落の底から

欧米の劇場のステージを客席より注意深く観察すると、ステージ手前の中央で、床がポコンと盛り上がっている場所がある。ここは別に照明器具などが配置されている場所ではなく、プロンプターという役割の人間が入る「プロンプターボックス」である。

このボックスからステージにいる歌手や俳優に様々な合図が送られるのだが、演劇の場合にはプロンプタ